

先天股脱(補正手術など)

座長：下 村 哲 史・藤 井 敏 男

先天性股関節脱臼の手術的治療に関して、6名の演者が発表した。品田は、Ludloff法により観血整復された2例に関して、初期治療難航例の、その後の治療の困難さについて述べた。中塚は、長期成績ではないが、広範囲展開法により観血整復された症例に関して、得られた求心性が、その後も維持されていたと述べた。伊達は、4歳7か月時に行った広範囲展開法単独での観血整復の1例について発表した。

後半の3演題は、補正手術であるソルター法の長期成績に関するもので、大山は、骨頭変形の無い例では、OA発生と骨頭被覆がよく相関しているが、骨頭変形のある例では、被覆が良くても早期にOA発生の危険があると述べた。西須は、ソルター法の長期成績は良好であったが、骨頭にKalamchi II型のペルテス様変化を伴っていた例および高度の遺残亜脱臼例での成績が悪かったと述べた。北小路は、ソルター手術の長期成績はおおむね良好であるが、成績不良群では、臼蓋形成不全、求心性不良の程度が強い例、およびペルテス様変化のある例が有意に多かったと述べた。

先天股脱治療の長期的な結果は、補正手術を組み合わせることにより良好な成績を期待できるようになってきているが、すべてに満足いく結果が得られているわけではない。今回の発表においても、初期治療において、ペルテス様変化を生じないようにすることと良好な求心位を得ることが、長期成績を良くする上で非常に重要であることが確認された。補正手術に関しては、ソルター法によりおおむね良好な成績が期待できることが確認されたが、早期にOA変化を生じてくる場合もあり、より長期の報告が必要だと感じられた。(敬称略)